

埃まみれ



史料室だより
第2号
1982.2.21

特集・一周年記念
編集 田辺 真人
発行 神戸・深江会館
電話 神戸市東灘区深江町3-5-17
5-7 (078) 411-0475

深江財産反哲理会委員
生活文化史料室理事
深山 健二

深江財産区管理会（太田垣正雄会長）が、地元の史誌編さんを計画、御影高校の田辺眞人先生のご諒解を得て、その中心的役割りを果たしていただきことになりました。

早速、資料の収集や聞きとり調査など、史誌編さんの方針についての検討がなされ、同時に、資料の収納や展示を行なう為に、史料室の建設についても平行して計画されることになりました。

ちょうどその頃、自宅の改築を考慮中だった私は喜んで旧居宅内の資料の提供を管理会に申し出しましたが、大変だったのは、その整理と搬出でした。

史料室も昨年一月、地域の多くの皆さまに祝福されて、神戸深江会館生活文化史料室としてオープンし、千人を超える人びとの見学があつたことがつておりますし、「歴史談本」昭和五十七年二月号などにも紹介されておりました。順調すぎる程の一年間で、本当に良かったと思います。

昭和五十五年春から灼熱の夏にかけて、太田垣正

雄会長、志井正夫委員、田辺眞人先生、史料室員の渡部永子さんが中心となり、大奮闘の結果、少しずつ資料が、それらしい姿をあらわしてきました。

先代も足を踏み入れたことのないような内納戸をおおつた埃は、実際に一センチメートル以上にも積もり、約百年間の静かな眠りを、その場で実証しておきました。太田垣会長と志井さんは、ゴルフ帽をかぶって完全武装、その額に玉の汗、埃にゆがむ顔、眼だけを出している感じの渡部さんも埃まみれ、皆さんきながらタイムマシンにでも乗つて、嘉永年間に今までいかのぼつて行かれたような感じすらしました。

ようやく出された資料の数々は、おびただしいもので、田辺先生のご指導により、手極よく撰りわけられていました。出来れば、この家ごと残すのがベストなんだが、と田辺先生がおっしゃっていたのを、今でも昨日のことのように覚えております。

誰にでも、なつかしい田舎がありますように、深江は、私にとってかけがえのない古里であります。唯それだけの理由で、私は、家の資料を差し続けることにいたしましたが、史料室オープン一周年に当たり、敢えて二年前にさかのぼつて、皆さまのこ苦労をご披露申しあげたく、ポイントを絞つてご報告させていただきました。

昭和57年(1982年)2月3日

テレビ	番組名	サブ	放送時間
5	マグネロボ	ガ・キー	0
	日本の風景	△ハニイちゃん	22
	NTODAY	△54回	40
	アスク	「めぞう生活史、街角のミニ博物館」	57
6	TVフジ	西野百合子	15
	百萬王ゴライオン	「幻」との再会	30



完成直後の史料室

オープン1年近くの2月3日
の夕、街角のミニ博物館がテ
レビに登場しました。

大日靈女神社の森に四角い深江会館。その左手に新築の史料室。

1981.2.21 史料室開館

約100人の参列者がわれわれの町のミニ博物館の門出を祝った。

深江の歩みと街かどの史跡

田辺眞人

農耕生活のはじまり

この近辺では北方の山麓に森北町弥生遺跡があり、本庄小学校の校庭からは石斧や土器が出土した。約二千年前の弥生時代にこの地で営まれていた祖先たちの生活の跡である。

深江駅の西を南流する高橋川の川筋に注意してみると、川をさかのばると阪神電車の北で、川は直角に西にむきを変え、約四百メートル西でまた北にむきを転じている。東西・南北と直角に曲りながら直線状に流れるこの川の流路は、古代国家の班田授課のための土地制度——条里制の地割りのなごりだと考えられている。

踊り松の伝説

律令制のもとでそのころ近在は、摂津国菟原郡草屋郷に属していた。

奈良時代の靈龜元年（七一五）、卯月卯の日の夜、

まづ暗な深江の沖の海上に不思議な光が現われた。

浜辺に集った里人の眼の前で、光は岸に近づき、浜

の松の大木の根もとに流れいた。そして光の中から、「われは稻荷の神。この山の手の森かけに祭れ」と

いう声がきこえた。人々は喜んで、その松の周囲を踊りまわって神を迎えて社を祭つた。これが、深江の北方にある森の稻荷神社のはじめだといい、神さまの憑着した松はそれから踊り松とよばれるようになつた。

また、一説では、ある時ひどい洪水があつて、森の稻荷神社も流されてしまった。その時、神さまがこの松の根もとに流れついてられたので、人々は喜んで松のまわりを踊りまわって神さまを森につれ帰つた。そのため踊り松というのだという。

ともあれ、五十年ほど前までは、森稻荷の祭りの時には深江本町四丁目にあったこの踊り松のところまで神輿のお渡りがあつた。

深江村の誕生

さて、深江本町四丁目に宇賀王寺という地名があつた。室町時代にそこに大日如来を祀る薬王寺といふ寺があつた。その寺のまわりの民家と、その東方にあつた豪族・永井氏の屋敷のまわりの集落とがあわさつて、戦国時代に一つの村ができる。芦屋川の西の低地に入りこんだ入江があり、それにちなんで深江村とよばれるようになつたといふ。

正寿寺と大日さん

文明天年間（十五世紀）の薬王寺の住職観空は、深江に信服して寺を浄土真宗に改め、延寿寺と改称して本尊も阿弥陀如来に代えてしまった。その後、寛永十年に永井三左衛門が出家し、空照と号して寺をついだ時、ふたたびその寺は永井山正寿寺と改称され、今ある地に移されたと伝えている。

一方、観空によつて寺から出された旧本尊の大日如来は、やがて村人にひきとられて祭られたものである。

大日靈女神社の南の東西の道路は、当時の西国街道の浜街道で、旅人も多く通つた。道ばたの名所をつづつた「深江」ゆれば大日如来高い高橋おどり



明治43年測量
深江付近

松、という偶詠もあった。明和六年（一七六九）、深江は瀬の海辺の村々とともに収公されて天領となり、明治維新に至っている。

史料紹介(一)

(兵庫県運上所の積出し許可状二通について)

長岡曉子

明治二十二年の町村制の施行に際して、西蒲の青木・西青木の村々と合併して本庄村を形成した。本庄村という村名はこのあたりに中世にあつた莊園の名に由つている。

しかし、歴史の中には悲惨な経験もあった。昭和十三年の水害や、第二次世界大戦中の空襲などである。深江一帯は、昭和二十年五月十一日の空襲ではほとんど潰滅状態になった。青木の浜にあった川西航空機甲南製作所（今の新明和工業）を爆撃するため、六機のB-29が数百発の爆弾を投下した。工場には二七〇発、東洋の商船大学には三十発の爆弾が落下し、この日の空襲で殺された人一二〇三名、負傷者八二四名と「神戸市史」は記録している。

今のはこの苦しい破壊から立ち直って、戦後から復興した新しい街である。しかし、このようすは街から街へと延びてゐる。そのような街がひめられてゐる。そのような街によると、どの歴史や郷土生活の資料を保存し展示しようと、小さな歴史館ができる。深江の村史調査で入手された約一千点の民具類を所蔵するこの「神戸深江会館文化史料室」には、打出焼などの陶磁器、祝いの旗や舞囃、古いカメラやトランプ、軍服や甲冑、農具や医具、明治初年の医学校のノート、大正期の新聞などが順次展示されている。

生活文化史料索



慶應三年五月に兵庫開港の勅許が出され、明治元年一月には参与兼軍事參謀兼外國事務取調掛東久世通権のもとで外國事務が開始さ

それで、(この)に神戸貿易の歴史が幕を開ける。初期の神戸港貿易は、明治五、六年以降については、元老院開港二十年史と明治三年刊、(ヨウジサンニンノヒガツトモシカイ)によれば、(西洋の)輸出にあたって、外國市場目的の輸出を生産するため、元老院は国内需要に応ずるために生産する。

兵庫縣

れが商品を、販路が都内から外
的に買い集め、横浜・神戸などに
運送させ輸出品にしたのである。

九月十三日

前述のように、この時期の史料はほとんどないのだが、本史料室には、明治三年の兵庫県運上所の

余七千八百斤皆清
九月十七日改

積出許可状」一通がある。先述の「統計表」がその性質上、当時の貿易の

をみると、入庫品の頃に
があり、数量は一〇六八
立不遇、目数二〇四、

全体像把握に役立つものに対して、この史料は、運上所での手続きなど具体的な実務を知るうえで大きく

位不明)一月數七・(月
二・九円となつてゐる。こ
は、外國商人の求めに応じ

貢献すると思われる。二通のうちの一通は次のとおりである。

所の倉庫で敷料を徴収のうえ、時預った貨物のことであつた。二年以降は、日本の他港へ

積出許可状である。そこで、「統計表」で明治三年の米に関する記載

船で回漕してきた輸出も預った。許可状の「唐

(表面)
送り状之事

この「支那光」における「思われ、二通はこのようの積出許可状であること」

一、唐米老萬斤
右脚改济繁品積送候間
改銷取可被成候以上

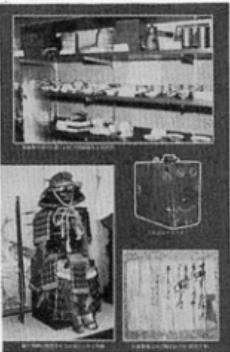
わずか二枚の文書であつて、その内容は、主として、
料の残存状況の悪い時期である。

九月十二日

あるだけに、開港当初のことを知るうえでの貴重な資料である。
（西田大学文庫）



史料室紹介誌から



↑
新人物往来社
歴史読本
1982年2月号

神戸市 →
市民のグラフ
こうべ
1981年11月号



地域住民の手による民俗博物館
生活文化史料室



明治文化

1



月刊神戸っ子
1981年9月号

↑ 神戸製鋼所社内報
ほむら
1981年4月号

神戸市東灘区役所
ひがしなだ
1981年4月号

生活文化史料室友の会会員（入会順）

1982年1月現在

手島 司	高橋 富雄	杉山 靖雄	山川はる江	森内百合子	坂上和三郎	清水 久雄
佐野 実夫	大川 弘	中島 義記	杉浦 昭典	浅井 敏正	磯辺 信三	飯田 信一
山村 昭	木下 正二	藤原 久子	山北 正夫	結城 正福	福田 毅	藤原 啓一
岡田 政人	高橋 敬三	石川さち子	又江 啓恵	位原 廉太	嵯峨山英樹	三浦 文子
尾崎 京子	金原 浩司	永井 真治	黒沢 勝	小熊 陽子	石田 初美	赤松 豊子
門前 喜康	門前 寛子	寺川 信子	小鳴 悅廊	原田 陽子	寺岡 一夫	小野山和子
加藤あおい	深尾 玲子	渡部 永子	植本 敏紀	植本笑美子	井渕 昭幸	加藤 賢治
坂本 恵一	佐賀 信一	立住 隆典	吉本 公一	中迫 一三	深山 健二	深山磨智子
深山 鉄平	深山 吉平	深山 逸平	深山 智子	中川 文雄	磯辺 謙	笠原ヤス子
天田 晃司	高志 直正	馬場 明代	志井 保治	田辺 是子	牧野 克	湯浅みよ子
佐藤 信子	赤田 博	吉村和歌子	加納 友子	寺田 音松	村上 政輝	永井 正規
楠 美智子	志井 札子	前中 隆一	久保川章雄	柴崎 敦馬	菊池 泰平	谷口フミエ
田辺ゆかり	河合宗治郎	柳原健太郎	庄古谷寿美	谷田 環	大川 常夫	黒田 智郎
鎌田 武	阪本 俊子	沢谷 ヒサ	堀内 康宏	横木八重子	鎌田 純子	米津 和代
福葉千代美	喜坂 未子	田辺 真人	多田 康治	納田 春雄	丹羽 信彰	太田垣正雄
柳原 稔	佐原 浩平	難波 宏彰	志井 正夫	岡田龍太郎	松尾 福夫	道谷 卓
八尾 重久	木下 重義	繆方 静江	森井日出夫	森井 胡子	森井 幸昌	久保 康子

協力団体

神戸市教育委員会／東灘区役所／神戸史学会／武陽史学会／芦屋市教育委員会／神戸商船大学／井上郷土玩具館／神戸華僑歴史博物館／株式会社大丸百貨店／サンテレビジョン／深江ショッピングセンター／神戸製鋼所社内報編集部／神戸共同印刷／県立灘影高校跡地部

史料室所蔵の砲弾について

土居一郎

当初予想していたのは異なり、第二次大戦以前の砲弾類について調べるのは甚だ困難な状況で、大砲・銃など武器そのものについてならまだしも、それには使用された弾薬ということになると、残念ながらお手あげに近いそうです。……特に日本では、研究体制の不備・人材の不足等から、実際にその砲弾の開発や製造・使用に携わった人々に聞いてみるよりないほど調べがつきにくいらしく、私の能力の及ぶところではありませんでした。

それでもいくつかわかったことがありますのでここに挙げてみます。……

小銃弾を除き、古くとも大正期以後のものと考えてよいようです。具体的には、まず弾頭に十百二十の目盛のついた径約七・五ミリ、全長二七・三ミリの砲弾ですが、これは弾頭限信管の榴弾弾で、これだけ新しいタイプは昭和に入つて採用された物と思われます。

弾頭部のない、径七・五ミリ、長さ二二・五ミリの砲弾は、比較的新しい大正期ころ開発・速射野砲（山砲）か、七五式野砲（山砲）で、砲身長二四前後、重量三百キロ前後、射程四千五百㍍（五千㍍）の、榴弾・榴弾砲です。落下した砲弾が無数の破片となつて飛び散り、人を殺傷するものです。

口径八・五ミリ、長さ二・三ミリ程度のしんらゆうの円筒物は、雷管。竹の切り株のような長い方の長

さで三十五ミリ、径九ミリの円筒は、分離装填式の火砲の薬きょうのようです。

小銃弾は薬きょう底部にロシア文字の刻印があることから考へると、日露戦争当時のものかもしません。

さて、おもしろいのは銃剣で、これが想像以上に古いものでした。正式名エンフィールド銃。日本ではなまつてエンフィールドと呼ばれ、一方では発明者の名をとつてミニエー銃ともいわれた歩兵用小銃の銃剣で、一八四一年フランス大尉ミニエーが発明、当時暮末期だった日本で、性能の優秀さと、日本の當時の軍隊が公式であることが相まって、各藩に大量に輸入されたそうです。

以上、資料不足、能力不足に加え、卒論に追われたため、やつとこの程度しか調べきれず、残念に思っています。今後も私の立場でお力になれそうな事項があれば、喜んでお手伝いさせていただきます。

（防衛大学校学生、昭和56年1月25日付）

旧深江だんじりの擢り鐘

鈴木武

先日、史料室來訪の折、展示品の中で「擢り鐘」に、紀伊粉川田元清之作の彫銘をみましたが、江戸期のものと見ました（左側の本庄村深江昭和八年（一九三三）銘（後刻銘）。調査してみました所、岸和田市円満寺に同作の半鐘（紀伊粉河町中田元清作）が現存しており、享保十二年（一七二七）銘であることから、明らかに江戸中期のものと推定されます。なお本鐘は、いわゆる双鐘の一つと思われ、出所等が判れば正寿寺との関係（宝暦四年（一七五四年）銘）の梵鐘現存など興味ある研究課題もあるかと思います。

（神戸製鋼中央研究所、昭和56年11月18日付）

友の会の一年

門前喜康



二階バスでの市内史跡ツアーワーク
(昭和56年12月6日須磨一の谷)

2年前の年の瀬、私と史料室との出会いがありました。当時私が担当していた番組の案内役を、田辺室長（郷土史研究家、県立御影高校教諭）にお願いして撮影場所のハンティングに深江の街を歩いていた時でした。熱っぽく史料室の完成を喜んでおられる田辺先生について史料を見て頂きました。そして開室。私も友の会員になつていました。

開室を前に、各新聞に町の人達だけ創った初のミニ博物館として大きく報じられましたが、その記事の中にも「立体的な活動」を一つの特色として謳

つている事が載っています。史料室を中心として歴史的な活動一何やらむずかしいイメージがなくはない。はたして広がっていくだろうか。私も少なからず心配でした。

しかしそれは第一回目の見学会（瀬の酒蔵と周囲の史跡を訪ねて）に参加していくべんに吹き飛びました。見学会には、地元の方々もたくさん参加されました。わたしは長いこと何でもこの前を通つたけど、そんなことがあつたんかいな。知らなんだナ！」同じグループで歩いていたおじいさんが、そう言つておられるのを聞いて、配られた酒蔵で仕入れた酒を飲みながら何から何へしくなつてくる気持ちでした。八月には南竜美術館から摩耶山天上寺（一泊）へ、年末には二階建てバスでの市内一周と、文字通り立体的な企画が続きました。

そして一周年。村誌の編さんもすみ、今年中に史料編が完成するそうです。土地の人々が郷土を愛し、その核となる史料室を通して人々が集まりその輪が広がっていく、とてもすばらしい事です。これが本当のコミュニティーと呼ぶべきものでしよう。ですから史料室はいつも私達の近くになければなりません。下駄履きで訪ねて行ければ……。そんな気持ちで一年目を迎えています。（サンTVディレクター）

神戸華僑歴史博物館（館長 陳徳仁）

9時～17時（年中無休）
大人 300円 学生 200円（10人以上団体割引有）
国鉄元町駅 西口から南へ5分の海岸通角
〒650 神戸市中央区海岸通3丁目東南角KCCビル2階
☎ (078) 331-1277

井上郷土玩具館（館長 井上重義）

10時～17時 毎週水曜休館（祝日は開館・翌日休館）
姫路駅から中國鉄道但線で23分の香呂駅下車
東へ徒歩10分。
〒697-21 兵庫県神崎郡香直町中仁野671-3
☎ (0793) 2-4388

入会のおすすめ 神戸史学会（代表 落合重信）

機関誌『歴史と神戸』（隔月刊）
会費・年額 2,000円（1～12月分前納）

〒653 神戸市長田区川西通3丁目8 太陽印刷内
☎ (078) 691-2085 振替口座 神戸4018

SUN-TV

サンテレビ

〒650／神戸市中央区港島中町6丁目9番
TEL(078)302-3333(代)

史料室の一年と資料提供の方々

赤松豊子

三編卷之三

史料室

五
十
音
圖

早いもので史料室がオープンして一年。朝日・毎日・読売・神戸・日刊スポーツなど各紙のほか、雑誌として「歴史と神戸」「月刊神戸っ子」「市民の

その後、多くの方々からたくさんの貴重な民具・史料・書籍の提供がありました。ここに協力して下さった方々のご芳名と主な寄贈品を列記します。

深江の地域史編さんとの過程で集った手余点の民具・史料を契機としてオーブンした史料室も、は一年／智恵を出し／あい、右往左／しながら、やつてきましたが、区域社会の歴史と生活文化の歩み

調査員

深山健一（生活用具・医事史資料・文書・書籍）・志井正夫（書籍）・伊吹順隆（々）・中川文雄（々）・結城正福（々）・林芳男（々）・神戸市教育委員会（々）

細分かはお伝えできたと思い
す／何とか安定した運営もでき
ようになりましたので、今年は
誌編さんを進め、史料集の刊行

赤松 豊子
尾崎 京子
金原 達司
嵯峨山英樹
小野山和子
北島もと子
天田 真理
水井 真治

永井博彦（古記録・古写真）・清水久雄（古銭）・
黒田 博（時計）・小西秋一（生活用具）・三浦文彰（地図）・
子（玩具）・吉本正義（児童）・金岡草文（地図）

長岡 晴子
寺岡 悅郎
小嶋 一夫
友の会幹事

謙田 武（大漁協・孟）・深江漁協（水産資料）・
深江消防団（消防資料）・深江青年団（青年団資料）・
松本ヤス（教育資料）・森信夫（農具）・伴せき（衣類）

異動があり、家事・就職などの
ため、渡部永子さんと深尾玲子さ
が退かれました／これまでのお

植本敬紀
大川告平
佐野末去
清水久雄
（以上常任
左原植本笑美子

料・生活用具)・太田垣正雄(火縄鉢)・永井静江(敬称略)
(衣料)

の運営や友の会の企画へのアドバイスを、お願いします／史料室より第2号、いかがですか／前

多田 康治
納多 春雄
門前 寛子

々な事があつたようと思われます。『深江会館生活文化史料室』を皆様方の御協力によつて盛り立てて下さる様、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

は開創特集として、新聞社上の
室の記事をまとめましたが、二
からは資料紹介や考察を載せる
定です／本号の「深江の歩みと

丸新鮮
大丸

新刊
只今、発売中です。

かどの史跡」は市立働く婦人の「あじきい19」を再編、運上の積出し許可状は、開港時の神戸の貴重な史料です／雑誌に載

遂
大

須歴史の磨
清賀、著者の昔から現在の新しい
時代の言葉を徹底的な眞理と確
かな学識で説く。
B4変形322頁、モノクロ20点
カラー写真50点、モノクロ20点
定価：1,500円

た本家の姿も収録しました／開
以来、応援して下さった市民有
役所や報道関係の各位に深謝

16

寄贈品が増え、少しでも多くの資料を観て頂こうと、二度の小規模な展示替えを行いました。五月二十一日には、紳・大礼服に代って掛けなどを出し、十一月十五日の展示替えでは、教育史や戦争の資料を中心に新たな資料を出しました。また、深江付近を描いた地誌を並べました。

収集資料については、深山健二氏から寄贈された約一千点の資料が、この史料室の出発点でした。

神戸新聞出版センター

